
オリジンブラッド・イモータル

絃城恭介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オリジンブラッド・イモータル

【Zコード】

Z9152Y

【作者名】

絃城恭介

【あらすじ】

人間には生まれながらにして前世の記憶が刻まれ続けている。それは言葉であり、経験であり、意味である。それを総称したものと科学者たちは『起源』^{オリジン}と名付けた。水城紺雨は『血』^{ブラッド}と言つ諸刃の剣の起源を覚醒させる。

前ノ藏眷属は最強の名をひたすらに追い求めてきた。その結果、慢心をし水城紺雨に敗北する。

彼は己の驕りに気が付き、初めからやり直すと決意する。

彼らは何を思い、何をするのか……
絃城恭介作品第一段、オリジナルブラッヂモータルよろしくお願
いします。

プロローグ（前書き）

プロローグ

一章

1 想いと書いのカタルシス

2 日常パラノイア

3 始まりのgeschüttung

4 衝動のアスペクト

二章

未定

プロローグ

とある青年の話をしよう。

誰からも認められることが無く、誰かに認められようと血反吐を吐く思いで努力をしてきた青年の物語を。

その青年の望みは切ないものであった。

誰かに認められたい、自分を馬鹿にしてきた者たちに自分の有能さを知つてもらいたい、と、そう願つて歩き続けてきた。

誰しもが一度はその苦痛を知り、その境地を乗り越え、手にする事のできるような小さな理想。

だからこそ青年は諦めると言つことだけはしなかった。
諦めると言つことは、自分の今までしてきたことを無に帰す行為だと知つていたから。

例えそれが誰かの犠牲の上に成り立つ望みであつたと悟り……
自分の望みを叶えると言つ事がどれほど死を生み出すかと言つことを理解したとしても……

一度は絶望こそしたが、彼は己の中に眠る起源を覚醒させることに成功させる。
彼の起源は『^{ブラック}血』と言つ五大属性に当てはまらない特別なものであつた。

起源を覚醒させた彼はとにかく喜んだ。だがしかし、それと同時に喜び以上の絶望を再び味わうこととなつた。

何故なら彼の起源である『^{アーチャー}血』を使用するたびに、彼の身体は吸血鬼に変わっていくと言つ事実を理解してしまったから。

だが、それでも良いのだと彼は自分を偽り納得させた。

他者の血を奪わなければ碌に起源能力を使用することができずとも、生きていく上では特に関係ないと。

しかし、青年は気付くのが遅すぎた。

この都市に入つたと言つことは、

否応無しに戦火の中に放り込まれ、

誰かの命を奪うことになると言つことに。

そんな基本を、今まで覚え続けていることができたのなら、少年は苦しむ必要など無かつた。

人間としての生を捨て、本能のままに生き血を啜り、本物の化け物として自身を完成させていたのならば、青年は今までのような人生を送つていただろう。そこには苦痛は無かつただろう。

だが、青年は違つた。

誰かの血液を奪うことに罪悪感を感じ、起源^{オリジン}覚醒者に虐げられる起源持ち（マテリアル）に手を差し伸べずにはいられなかつた。

誰よりも特別な力を持ち、誰よりも心の優しかつた青年は

余りにも人間過ぎた。

その優しさのせいで、青年は幾度も絶望を味わつた。生死の境界線に幾度と無く立つた。

親しい友人が居た、想いを寄せる人が居た。

その者たちの前で能力を使うたびに、青年の周りからは少しづつ人が離れていつた。それでも青年は己の生き方を変えることはしなかつた。

離れ行くと知つても、助けたい誰かに手を差し伸べ、感謝され、そして畏怖される。いつでも青年は束の間の幸せを手放すことはできなかつた。

そして今、青年は最大の決断を迫られている。

常人の視力の外の距離にある場所に、三桁では収まらないほどの人間が建物を警備しているのが見える。

凍えるほどに冷たい夜風は、ビルの屋上に立つ青年の身体を無常

に吹き荒んでいる。

そんな夜の暗闇に包まれた冷たい世界で、青年は葛藤していた。

「これで失敗したら僕は『不死』の少女を一度と救えない……けど、本当にそれでいいのか、僕は」

たつた一度のミスで都市の全てを敵に回すような危険な挑戦。それで得られるものはたつた一人の少女の笑顔だけ。

それでも、青年は少女を助けたいと思う理由は一つある。

一つ目は、ついに輸血パックによる血の摂取では肉体を維持させることが不可能になつたと言うこと。

二つ目は、過去にたつた一度だけ見た少女に「たすけて」と言われたような気がしたから。

「名前も知らない人間に、直接言われたわけでもない言葉のために僕は、全てを敵に回す覚悟はあるのか」

青年の答えは既に決まっていた。

どれだけ自問自答を繰り返したとしても、この問い合わせに対する答えは一つしか持ちえていないのだから。

「はは……僕は、過去の僕と決別するんだろ。誰にも認められないことに苦しんでいた僕と」

青年の呆然としていた表情が変わった。

その表情は、葛藤の末に自ら答えを決めたものにしかできないような晴れやかな表情であった。

ただ誰かに認められたいという想いの元に生きてきた青年が、ようやく気が付くことのできた新たな想い。

ゆつたりとした動作で青年は輸血パックを胸ポケットから取り出すと、それを一気に飲み干す。

「僕は、この気持ちだけは裏切らない。偽るつもりは無い

次の瞬間、青年　　水城緋雨みずきひさめは言いようの無い高揚感に包まれた。

全身を熱く煮えたぎったような血が駆け巡り、心臓がドクンと一
つ大きくする。緋雨はこの状態になつた血液のことを魔血イビルブラッドと呼ぶ。

文字と呼び名の通り、魔の血。

他者の血を攝取した場合に自然に発動し、使用者である緋雨の身体機能を全体的に上昇させ、人間をはるかに凌駕した身体能力を得ることができる。

つまり、ビルの屋上から飛び降りることくらい緋雨にとっては造作も無いこととなるのだ。

軽く地面を蹴りつけ、隣のビルに飛び、目的の建物に向かつて一直線に夜空を駆ける。黒い閃光となつた緋雨を常人の視力で捉えることができるはずも無く、三桁を超えるほど警備員共は何の意味も無く突破された。

建物の中に進入をした緋雨は何の苦も無く『不死』の少女の居る部屋に辿り着けた。

部屋の前に立ち、名も知らない少女を助けに来た緋雨は思つた。
(これじゃ、僕が悪役みたいだな……)

そして、扉を開けた彼を待つていたのは『不死』の少女と、素知らぬ表情で待ち構えるように立つていた男が一人。

「よう、オリジンブラッド。常々アンタとは戦つてみたいと思つてたんだよ」

オリジンブラッド。それは水城緋雨に付けられた通り名である。

「僕は出来る事なら戦いたくない……彼女を此方に渡せ」

「おいおい、つれないねえ。俺はアンタの敵で、アンタは俺を倒さないと不死の少女を奪えない。だったら殺りあうしか無いだろ?」

「時間が無い……殺されても文句は言つくなよ　　なにせ、僕は化け物だからね」

無表情のまま、冗談のような口調で言い終えた緋雨は、ベルトに付けているホルスターからナイフを取り出す。

「オリジンブラッド……俺を馬鹿にしているんじゃないだろうな?」

男の問いに、緋雨は答えることなく……

取り出したナイフで自分の掌を串刺しにした。

「勘違いするなよ起源覚醒者……これが僕の戦い方だ」

流れ出る血液が地面に零れることなく、重力に逆らい刃を形成していく。酸素と結合したことにより真紅の血液はどす黒い赤となり、無骨な石の刃のような形状になった。

しかし、絶えず流れ続ける魔血によって形成された刃は一定間隔で鼓動を刻み、まるで生きているかのような錯覚を覚えさせる。緋雨はこの魔血で生成した刃を『傷つけるモノ（ラクサー・シヤ）』と呼ぶ。

「臆したなら恥も外聞も無く逃げる。これを見てもなお、僕と戦うと言つのなら容赦はしない」

怒氣も霸氣も何も無い、無表情で緋雨は男に告げる。

だが、男には逃げると言う概念が存在しなかつた。刃の前に存在する緋雨と戦つ日を待ち望んでいた男にとって、緋雨の言葉は心を躍らせるだけであった。

ただ最強の称号を刃指してきた男に、恐怖など存在しない。

在るものは戦闘に対する高揚感と、勝利をした時に得られる快感のみ。

「ハツ、容赦しないだあ？ 笑わせんなよ、オリジンブランチド。俺はお前に勝つためにここに居る。逃げるって言つのは死ぬことを言うんだよッ！」

だから男は緋雨に向かつて自分の全てを見せつめりであった。否、見せるはずだったのだ。

「なら……覚醒者千人を同時に相手取つて倒せるくらいに強くなれしかし、男に待ち受けていたものは絶望と苦痛であつた。

「な……あ、嘘……だろ こんなはずじゃ…………」

緋雨のラクサー・シヤによつて腹部を突き刺された男は血液を流すことなく倒れ伏せた。

「……世界は『～じやなかつた』に溢れている。殺すつもりじゃなかつた、傷つけるつもりじゃなかつた、そんな言葉は嘘だ。全部わかつていてそれを言つんだ。逃げるための口実、僕はそれを自分で

経験してきた知つてこるよ。そんなものは自分の甘さに過ぎなこと

て

だから

そう言つて緋雨は言葉を紡ぐ。

「悔しいと思つたのなら諦めるな。何でもいいからその意思を強く持て」

「それは詭弁だ……オリジンブラッド……俺をここで殺せなことお前はきっと後悔するぞ……俺は、お前を必ず殺す」

そんな事を最後に呟いて男は完全に意識を失つた。緋雨はそれを見届けると、ただそこに座り込んでいた少女に手を差し伸べた。

少女は緋雨から差し伸べられた手を掴むべきか、掴まぬべきかを迷つているのか手を出しても引っこ込め、緋雨の顔を見ては俯くと言う動作を繰り返している。

緋雨はそれに対しても何も言つことなく、ただこの手を握つてくれるときを待ち望む。強制するつもりも無い、緋雨はあるときにはあのときに聽いた言葉を信じるのみ。

だから、いつまでも待つつもりであった。

そんな時、少女から聞いかれるような言葉が口にされた。

「なすなを助けること……何の意味があつたの？」

そんな問い合わせをされた時、緋雨は迷つことなく、初めから口の中に存在していた言葉を口にした。

「たすけてって言われた気がしたから」

緋雨がそう言つと、少女はいつの間にか差し伸べられていたその手を掴んでいた。

緋雨も、掴まれた手を決して離さないよう握手り返す。

これが『不死』の起源覚醒者である少女と、『血』の起源覚醒者である緋雨の始まりの一歩である。

「助けに来てくれたありがと」

少女は、満面の笑みで緋雨に微笑んだ。

プロローグ（後書き）

1 想いと誓いのカタルシス

1 想いと誓いのカタルシス

現代科学の語るところによれば、起源とは一種の超能力のようなものであり、誰にでも生まれたときから魂に情報として備わっているらしい。

多くのものはその魂に五大元素に属する起源を備えている。しかし、いく少數にそれらの起源とは全く別の特別な起源、希少起源が発生することがある。

それは『七つの大罪』や『不死』、『言葉』、そして『血』といった発生源が確定していないものである。

だが、その他にも『多重起源者』といった複数の起源を一つの身体に宿した人間も存在する。

かいつまんでも要約すれば不死の少女、桂燈なすなが緋雨から受けた説明はそのような内容であった。

「つまり、僕や君は希少起源者に当たる存在になる。ただの起源者たちと違つて、僕たちのような存在は科学では解明されていないことを解明するための材料にもつてこいなんだよ。それが幸福なのか、それとも不幸なのか……それを決めるのは自分自身なんだけどさ」「何かを思い出すかのように、自嘲気味に説明を続ける緋雨。

窓が南側に一つだけ存在し、六畳半の部屋には木製のテーブルが一つとソファーが一つ、そしてベットが一つだけある。そんな部屋でなすなは緋雨と二人つきりだった。

「緋雨は起源覚醒者になつたことを後悔している?」

だから、なすなは緋雨に確かめようと思った。

緋雨が語ることは全て偽りの無い事実であると、何故だかわからぬが、なすなはそう思い込んでいる。

そして何より、起源について説明をする緋雨の表情が氣に掛かってしまった。

「きっと僕は後悔していた……」

「……していた？　どうして過去形なの？」

「していたからだよ。けどね、過去に縛られたことほど無意味なことも無いって知ってる。だから、今は後悔していないと思っている」

「思つてこらつて、結構どつちなの？」

なすなは緋雨から帰ってきた言葉がどうりなのか理解できず、「元緋雨に答えを催促する。

緋雨としては、自分が起源覚醒者になつたのは自信の田標であつた他人に認められたいと言つ思つがあつたために起源覚醒者としてここに存在している過去がある。

だから、答えと言つものは存在しないといふてもいいのだ。

「あえて言つならどうちなんだろ？」「

よつて、返答も曖昧なものになる。

「緋雨はこじわる……」

だが、そんな答えでなすなは納得できない。緋雨の言葉は言葉遊びのようになすなは結論的に眩いていた。

「『めん』『めん』、謝るよなすな。けどさ、今の答えが僕にとっての答えなんだ。だからね、ちゃんとと言葉にできるようになつたその時、もう一度質問をされたら答えるつて約束するよ」

緋雨の言葉になすなは上目遣いで聞き返す。

「本当に？」

「ああ、本当に」

それに対し、緋雨もまっすぐにその眼を見て答えた。

お互に数秒見詰め合つているうちに、緋雨は恥ずかしくなつてしまい眼をそらす。なすなはそんな緋雨を不思議そうな眼で見てから、何かを思い出したかのように再び質問をした。

「緋雨の起源は『血』……それって、どんな能力なの？」

「ああ、それなり

それまで言にかけたところで、緋爾は眞実を述べるべきか否かを

悩んだ。

『助けて来てくれてありがとう』

その言葉が緋雨の心に響く。

初めてこそ、不死ならば目立った行動をするまでも無く血液の供給源を得られる。そんな利用しようと思ふ気持ちと、本当に助けたいと言つ気持ちが存在していた。

だがそれは、結論だけを出すと利用するためだけに助けたと言つことになる。

つまり緋雨がなすなにしようと思つていたことは、今までなすな
が囚われていたところの人間がなすなにしてきてことと変化がない
ということ。

「...緋雨？」

利用することは何も悪いことではない。弱肉強食が世の中の摂理であり真実だ。

だが、それでは何も変わらない。

「言いたくないなら言わなくともいいよ……だって、いつか教えてくれるんでしょ？」

なずな…………。ああ、いつか話すよ。きっと、いつか
緋雨がそう答えたところで、なずなが小さく欠伸を漏らす。
緋雨が時間を確認すると深夜2時を回ったところであった。

「緋雨……なずな眠い」

「そうだね。時間ももう遅いし…… なすなはベットで寝ていこうよ。
僕はソファーで寝るから」

「うん……ありがとう」

なずなは部屋の隅に設置されているベットに向かつて、うつらうつらと眼をパチクリさせて歩いていく。その後ろ姿は手に大きなウサギのぬいぐるみを持たせたらきっと可愛いのだろう。

緋雨はそんなことをなずなの後ろ姿を見て考へてしまつた。不覚にも、自覚は無いが笑いが零れ出でてしまつていった。

「ふふっ」

「どうしたの?」

その声が聞こえていたらしく、なずなは今にも閉じてしまいそうな瞳で緋雨を見つめながら不思議そうに聞くのだ。

「いや、なんでもないよ。おやすみ、なずな」

「うん、おやすみなさい」

夜、それは緋雨にとつては長い長い時間である。昼間とは違い、人工の光は夜の街をさんさんと輝かせている。

酒を飲む者、大勢で群がる者、嫌がる女性を襲う者……実際に多くの人間の本性が垣間見ることのできる時間帯である。

『血』の起源を覚醒させてからと云つもの、緋雨には睡眠欲があり現れなくなつた。確かに眠いかと言われば眠いのだろう。だが、それは今までの習慣の名残であり、実際に眠る必要があるかと言われるのなら必要は無いのだ。

眠る必要がないということは確かに便利である。しかし、それは同時に人間としての機能が足りなくなつたと言つことの現われでもある。

だから、緋雨は人間として他者を觀察する。その行動はきっと、大切な何かを失つてしまわないように行つてゐる、云わば自衛行動なのだ。

人としての在りようまで忘れてしまわぬようにと。

「なすな……君は僕の正体を知つても、また「ありがと」」と言つてくれるかい?」

ベットで眠つてゐるなすなを起しきなによつて、緋雨はなずなの頭をくしゃりと撫でる。

「父さん、母さん……僕はこの娘のためにもつ一度がんばつてみるよ」

それは、自分に対する誓いの言葉であったのだろう。自分のように、もう手遅れの人間とは違うなずなに、人並みの幸せを知つてもらいたいという緋雨の願いであり誓いでもある。

「ありがとう……ありがとう、ひため……」

「カタルシス……か。なずな、君は僕の心に溜まつた濁おつを浄化してくれる。僕も君にありがとうって言つよ」

その言葉に反応するよつて、なずなは小さく可愛らしくしゃみをし、寝息を立てて気持ちよさそうに眠りつづける。

緋雨が久しぶりに感じた人の温かさは、こんなにもすぐ近くにあつたのだ。

2 日常パラノイア

2 日常パラノイア

水城紺雨が桂燈なずなを眠る姿を見守つてゐる丁度その頃、起源開発都市に複数存在する救急搬送受け入れ病院に一人の男が運び込まれていた。

その男は不思議なことに、腹部には深く切り裂かれたような傷があると言うのに血が一切流れていない。そこに見えるのは生々しく切り裂かれた傷痕と、血の氣を感じさせない肉の壁だけだ。しかし、その傷口すらも既に塞がりつつある。

「おい、医者。とつとと輸血しろ……血が足りねえんだよ」

何かに飢えている獣のような瞳で睨み付けられた医者は、眼を合わせた瞬間に自分の意思とは関係なく、男に言われたとおりに輸血の準備に取り掛かる。

この男 前ノ蔵眷属の起源は『支配』

自分と対等、もしくはそれ以下の無機物、有機物、意味に対する絶対的な支配能力。それが前ノ蔵眷属の『支配』という起源がもたらした力である。

それはつまり、他者の起源すらも支配することが可能な力であった。それゆえに彼は最強の称号を手にすることを目的にした。最強と言つ称号を手に入れるということは、あらゆる起源を意のままに操ることが可能になるということ。

「俺はいつから勘違ひしてたんだろうな」
井の中の蛙大海を知らず。

己が魂に刻まれた情報は誰よりも優れたものであると信じ込み、この起源開発都市にきた彼は身をもつてその言葉の意味を痛感した。今まで誰にも負けたことが無かつたのは己の世界が狭かつたから。

新たな世界で幾度の敗北を味わい、辛酸をなめる事となつた彼は、己の浅はかさと無知を知つた。

だから彼は只管に戦い続けた。

自分を優れた人間だと知らしめるためには、誰よりも強いということを証明すること他ならない。

それでも自分より強いものは数え切れないほどに居た。そのたびに戦いを挑んでは勝利を重ねてきた。だから勘違いしてしまった。弱者であつた自分はもう居ない。

そう誤解するようになつていてはつい最近のことであった。

「でも、ようやく思い出したぜ……」

己の力に溺れていた彼はもう居ない。ここに居るのは初心を思い出す事のできた眷属と言う男だけ。

日常的に自分を強者だと驕っていたパラノイアを抱くことはもう無いであろう。

「俺は一からやり直すんだ。弱者を踏みにじる強者を俺は捻じ伏せる　それが俺の想いだつたんだ」

徐々に血色の戻りつつある身体を救急搬送されたベットから起こし、近くに置いてあつた自身の靴を取り、それを履く。
輸血のために刺された針を腕から抜くと、彼は自分の足で病室を後にする。

その足取りは決して軽いものではなかつたが、一步一歩を確かに踏みしめ歩いている。そんな時、彼の塞がりつつある傷口に何かが衝突してきた。

「ハ？」

その衝撃で彼の塞がりつつあつた傷口は微かに開き、彼の着ていた服の腹部に血が滲んだ。

「痛いなあもう。ちゃんと前見て歩かないとダメなんだぞお？」

「あのなあ……どの口がそんなことを言つてんだ、女。よく見ろ、

塞がつてきてた傷口が開いちまつただろうが…」

眷属はぶつかってきた女の物言いに我を忘れて怒鳴りつけた。女はそれを煩そうに聞き流しながら「じめんじめん」と言つて走り去つてしまつた。

「なんだつたんだよ、あの女は　　」

眷属が怒りを通り越して呆れれようとしたとき、彼にぶつかって走り去つた女の悲鳴が夜の病院の通路に響いた。

「チツ……今日は本当に厄日だ」

激しい運動をすれば開いてしまうであろう傷口を摩りながら眷属は進行方向とは逆に向き直り、悲鳴のした方向に歩く。

（まあ、たまにはいいか……）

しかし、悪態をつきながらも嫌そうな顔はせず、眷属の気分は悪いものではなかつた。

「おい、女あ。せめてもう少し誠意の籠つた言葉で謝るのが筋つてもンだらうが！」

突き当たりにあつた病室の扉を勢いよく彼は蹴り倒す。その部屋の中では先ほどの女が唖然と口を開いてこちらを見ていて、それを囲むように存在する三人の男は殺意の籠つた目で彼を見つめる。

「なんだお前ら？　俺はその女に用があんだよ……邪魔すんなら容赦しねえぞ」

眷属の言葉を聞いていた三人のうち一人が彼に向かつて、見下すかの口調で話しかけるものがいた。

「おいおい、坊主。物事には優先順位つてものがあるんだ。後からおいそれとやつてきた人間になんだかんだ言われる筋はねえんだよ」「な……に？」

「だからよ……今なら見逃してやるつて言つてんだよ坊主。お前だつて命は惜しいだろ」

強者とは弱者に対して関心を示さないものである。それは、今までの眷属が身をもつて体感してきたこと。

ならば

「はン、掛かつてこいよ自惚れ野郎共」

負けることは無い。いかに三人相手であらうとも眷属にとつて数の差は大した物ではないのだから。

「アジーン、ドヴァーやれ。俺は任務を遂行する。殺すなよ
アジーンと呼ばれた大男と、ドヴァーと呼ばれた瘦躯の男は立ちふさがるように彼の前に立つ。

「なんだ、逃げンのか？」

「安い挑発だな」

アジーンとドヴァーに命令をした男は、眷属にぶつかつた女を肩に抱えると窓を開けて飛び降りる。

「戦うよりも任務遂行が大事なんでね。それが仕事人つてもんさ」
眷属はそれをすぐさま追いかけようとしたが、アジーンとドヴァーに行く手を阻まれて追いかけることができない。

「ア、アニキに命令されてるから通すわけにはいかないんだな」
「ワリイがここで眠つてくれや坊主」

アジーンは手から大きな炎の塊を出し、それを眷属に向かつて投げつける。

(炎の起源覚醒者か……けど、こソくらいなら安いもンだ)

「仲間の能力で眠つてろ」

眷属は襲い掛かる炎の塊を『支配』すると、触れることがなく弾き返す。

その異変に気がついたのは使用者のアジーンではなく、隣で立っていた瘦躯のドヴァーであった。

ドヴァーは横に飛びのくと手に大きな氷塊を作り出し、アジーンに迫る炎の塊に投げつけて相殺する。その際に一瞬にして蒸発した氷の塊から噴出された水蒸気でアジーンとドヴァーは眷属の姿を見失つてしまつた。

「いい能力だな……だが、俺にはおよばねえ」

炎の塊と氷塊がぶつかる瞬間に、病室の窓から飛び出した眷属は

空中で眩ぐ。今思えば、彼が飛び出した病室は六階であり、かなりの高さがあった。

だが、彼の起源である『支配』にそんなことは関係ない。六階から地上までの距離、役19・16メートルの距離を支配し、距離をゼロにする。

眷属の起源である『支配』は、他の能力とは違つて凡庸性が高いのである。制限こそ厳しいものの、その限られた範囲の中であるのなら間違いなく最強の能力である。

着地の際に足に掛かる衝撃を支配し、全て地面に受け流す。そのせいでコンクリートの地面に鱗が入るが眷属にとつて知つたことではない。

「さあて、どこに逃げやがつたンですかねえ……なんて言つとでも思つてんのか」

彼は病院裏の路地裏……正確にはその入り口に存在するワゴン車の方に向かつて声を投げる。

「へつ、ガキの癖にいちいち勘の鋭いやつだ……なあ坊主、お前はどうして俺たちの仕事の邪魔をする?」

「仕事の邪魔だあ？ そんなン知つたこいつちやねえよ。俺はお前の抱えてる女に用があんだ」

彼にとつて、理由なんてものはただの気まぐれに過ぎない。眷属は気に入らないことをただ潰しに来ただけなのだから。

「そんな程度で他の人間の人生を台無しにするつもりなのかよ、坊主」

「他の人間の人生を台無しにするだあ？ テメヒ、まずは自分のしていることを見てから言つんだな」

一步、また一步と眷属は女を抱えた男に近づいていく。

「そりやそうだつた。それで、俺をどうするんだ？」

「ソイツを俺に渡せばよし、そつじゃなければなんて言つ必要はねえよな?」

「質問に質問で返すのは感心しねえが……確かにそつだ」

男は抱えていた女を地面に降ろすと、そのまま一気に後ろへ飛びのぐ。

「なんだ、随分と素直じゃねえか」

眷属の言葉に男は微笑を漏らすと、いたつて普通に言葉を返してきた。

「流石に一人で『支配者』に逆らつほど愚かじやねえわ」

「テメエ！」

「次は相応の準備しどいてやるからよ」

そういう残して、男は自分の影に溶け込むかのように消えていた。「クソ……意味のわからねえ厄介事に首を突っ込んでしまったかねえ」男が消えたのを確認してから、眷属は小さく呟く。そして、地面に横たわっている女の頬を平手で軽く叩く。

「おい、起きろクソ女」

「んん~」

ぼわぼわとした表情をしたままなかなか起きない女に、眷属は若干だが苛立ちを覚え始める。

「おい、ビッチじやなかつたら起きやがれクソ女」

「だーれがビッチだあ！」

「反応してんじやねえよ！」

「あれ？ さつきの口の悪い少年君じゃないの……もしかしてお姉さんの色香に引かれて追いかけてきちゃったの？」

会話が全くかみ合わないことに、先ほどの苛立ちは完全に消え去り、どちらかと言うと呆れ果ててしまつ眷属である。

「めんどくせえ女だな……」「イツ

「ハイシじやないぞ少年。お姉さんには結衣と言ひな前があるんだぞ」

「マジで厄日だ……今日は

眷属は背中に結衣の声を浴びながら、夜の街に消えていく。

眷属の日常パラノイアはいつになつたら消え去るのだろうか。

それは、これから先の彼にしかわからないことである。

3 始まりのゲシュタルト

3 始まりのゲシュタルト

窓から差し込む日差しの輝きに気が付き、瞼を閉じて座っていた緋雨は目を開く。

隣ではつい先田助け出した不死の少女、桂燈なずなが眠っているベッドがある。手を伸ばせば届く距離に

「あれ……なずなが居ない?」

緋雨はその異常に気が付き、その場でがばっと立ち上がる。そして部屋の中を確認するが、緋雨はなずなの姿を視認することはできなかつた。

「この匂い……まさか」

普段はほとんど使用することの無い台所から卵の焼かれる匂いが漂つてくる。

そこで一つの疑問が発生した。

(なずなのやつ……料理できたのか?)

全く見当違ひな疑問であった。本来、ここで思い浮かべるような疑問はそちらではなく、「どうやってなずなは緋雨に気づかれる」と無くベッドから抜け出し、台所に行つたかと言つところである。

だが、緋雨はそんなこといざ知らずに台所に入った。

「おはよう……緋雨。まつして、もう少しでできるから」

小さな身体を必死に動かし、フライパンを巧みに操るなずなの姿は今まで囚われていたとは思えないほどに精錬された動きであった。しばしの間、緋雨は我を忘れてその姿に見入つてしまつ。

「どうしたの?」

なずなはそんな緋雨の姿を見て、怪訝そうな表情をして問い合わせる。

「い、いや。料理なんかできるんだなって思つてね

「そんなに不思議なの？」

緋雨はそんななはずなの視線に耐えることができずに、苦し紛れに「いつ尋ねるのだ。

「何か手伝うことは無いかな？」

「大丈夫だよ。本当に後ちょっとだから」

綺麗に焼かれた卵焼きが準備されていた皿の上に載せられる。その他にも、よく見れば冷蔵庫に余っていたであろう野菜屑で作られたサラダや、トマトで作られたスープがあつた。

果たして、なずなは何時間前に起床して料理をしていたのだろうか。そんなことを頭の隅で緋雨は考えながらも、最後までなずなのが行動を見守っていた。

「あのね、一つ聞いてもいい？」

「どうしたんだい？」

ほとんど使われてなかつたテーブルの上に所狭しと並べられた朝食の数々を前に、テーブルを挟んで緋雨はなずなに再び問い合わせられる。

「緋雨つて今までどんなもの食べていたの？」

「コンビニ弁当とか外食、あとファーストフードで済ませたり、食べなかつたり……それがどうかしたのかい？」

起源を覚醒させてからと言うもの、緋雨の食事はだんだんと簡単なものに移り変わつていった。

その理由としては、今でこそはそうではないのだが血を飲んだ後に物を食べることに抵抗を持っていたからである。あの血なまぐさい飲み物を口にした後にはとてもではないが口に物を入れる気にはなれなかつた。

下手をしたら、食事の最中にそのまま戻してしまいそうだ……

「ダメ……これからは私が作るから、ちゃんと毎日食べて」

「はあ……」

「食べるんだよ？ 約束して」

正直な話、能力を使用した日以外ならその提案は緋雨にとって魅力的なものである。

今まで無駄に食費に掛かっていた分の金を減らすことができる、な
どの安全も確保できるからである。

だがしかし、毎日と言つことは起源能力を使つた日にも食べなけ
ればならなくなる。出来る事なら起源能力を使用したその日には食
べたくは無いのだが

それが緋雨の考えであった。

「いいけど……どうしても食べたくない日は勘弁してくれないかな
？」

「食べたくない日？」

「うん、そんな日もあるんだよ。だから、そんな日は許してくれる
かな？」

緋雨がそう答えると、なずなは精一杯考えるような素振りをした
が、結局理解できなかつたのか不思議そうな顔をして答える。
「よくわからないけど……わかつた。そんな日もあるんだよね」

「ありがと、なずな」

につこりと、緋雨がなずなに微笑みながらそう答えるとなずなは
緋雨に微笑み返した。

もともとなずなの顔は可愛げのある顔立ちなのだが、なずなの不
機嫌ではないがどこか達観しているような表情のせいでわかり難い
だけなのだ。

そんなことを緋雨は頭の中で思しながら、綺麗に焼かれた卵焼き
を一つ箸で掴み取ると口に運ぶ。

それを見ていたなずなは心配そうに緋雨に尋ねた。

「おいしい？」

愚問であった。今までは「ンビーナリヤフアストワード」のような、
誰が食べてもそれなりに美味しいと言つようなものばかりを口にし
てきた緋雨にとって、誰かのために作られた料理と言つモノのは聞か
れるまでも無く美味しいのだ。

だからこそ、緋雨は屈託の無い言葉で答えることができる。

「うん、美味しいよ」

「よかつた……」口も食べてみて

こんな毎日が、こんな日常が続けばいい。

そんなことを思いながら、彼ははずなの作った手料理を口に運ぶのだった。

緋雨は後悔していた。特に食べる必要も無い朝食を食べてしまったことに。

それもそのはずだ。味覚が旨いと判断したものを胃に収めた状態で、俗に言つ満足している状態で不味い物を口にしたらどうなるか。もちろん、身体はそんなものを受け入れることなく押し戻そうとする。

つまるところ、緋雨は桂燈なずなを取り戻しにきた起源覚醒者と戦うために輸血パックから血を摂取したのだ。

今この彼の気分は最悪である。久々に心のそこから美味しいと思えたものを食べて満たされていたというのにも関わらず、心配していきた出来事が起きてしまったからだ。

「緋雨……気分悪そう。顔色悪いよ……」

緋雨の腕の間に挟まる形で抱えられているなずなは、明らかに顔色の悪くなつた緋雨の表情を見て心配そうに尋ねる。

「大丈夫だよなずな。いつものことだから」

それに対し緋雨は、平常を装つて言葉を返すことができない。

空腹時に摂取する血は緋雨に高揚感を与えてくれるが、食後ほど萎えるシチュエーションは無い。

だから、緋雨としてはさつさと撃退もしくは殺してしまつて家でゆつくりと休みたいのだが……

「瞬間移動か……また厄介な敵が来たもんだ」
テレポーター

彼ともっとも相性の悪い敵が襲撃してきたのである。

もっぱら、緋雨の能力は直接戦闘に大きく偏っている。身体能力

の底上げや肉体の復元、血液の流体操作などなど…………それも、全ての能力が2ランクほど落ちている状態だ。

本来、彼の能力は他者から直接血を摂取するという条件がある。だが、彼は輸血パックによる不完全な覚醒状態で戦っている。

よつて、魔血の生成量も減少し貧血が常に続いている状態なのだ。つまり、顔色が悪いのはいつものことであるといふのはあながち間違いではないのだ。

（傷つけるモノで一撃入れることができれば赤き血を吸うモノ（デアルグ）で完全覚醒できるんだけど……相手は遠距離からのちまちました攻撃）

「仕方ない……少し骨は折れるがアレを使つとするか

「緋雨……アレってなに？」

まるで抱きかかえられている猫のような状態で、なすなは緋雨に尋ねる。

「あ……あんまり見ていても気分のいいものではないから、見ないほうがいいと思うよ」

「ううん、大丈夫だよ。緋雨は緋雨だもの」「なすな……でも、ダメだと思ったら目を瞑るんだよ。わかつたね

？」「

「…………うん」

そういうなり彼はベルトに着けてあるホルスターからナイフを取り出し、自分の手首を淀みない動作で引き裂く。

その光景になすなは一瞬、目を閉じてしまいそうになるが、先ほどの言葉は嘘ではないといふにじつかりとその光景を目に焼き付けている。

「ティンダロスの獵犬」

絶えず手首から流れ出る血は犬のような形になっていき、最後には完全に狼の姿となつて緋雨の足元に完成する。

その途端に先ほどまで流れていたおびただしい量の血液はぴたりと流れなくなり、引き裂かれた傷口だけが生々しく残っている。

「緋炎、僕を狙つてくる覚醒者の位地を把握できるかい？」

ちょっとした貧血状態になりながらも緋雨は自分の血液で作り出された獵犬、緋炎の頭を軽く撫でる。

緋炎は自分の主の言葉を理解したのか颯爽と駆け出してゆく。

「緋雨……辛そうだよ。大丈夫？」

「ちょっと厳しいかな……なずな、少し目を瞑つてくれないか」

「……分かった」

緋雨の言葉に従い、なずなは目を閉じる。それを緋雨は確認してから、あらかじめ複数用意していた輸血パックのうちの一つを手に取ると、一瞬だが飲むことを躊躇つてから一気に飲み干した。

先ほどよりは幾分かマシな状態であるが、やはり味は最悪である。胃から競りあがつてくるものを一緒に飲み込みながら、緋雨は魔血の生成に集中する。

（輸血パックじゃダメだ……なずなの血、きっと美味しいんだろうな）

極度に生き血を吸わないでいると時折、思考を支配するほど強くなる吸血衝動を抑えながら、緋雨はなずなに優しく言葉をかける。

「もう、目を開けてもいいよ」

「うん」

それと同時に、緋炎の遠吠えが聞こえてくる。緋雨は即座に遠吠えの聞こえてきた方向に向き直ると走り出す。

その間もなずなは心配そうに緋雨を見つめ続けている。

（信用されるのかな……僕は。それは嬉しいことなんだろうけど、複雑な気分だ）

それから少し走り続けたところに、緋炎に襲われている人間を発見することができた。

（全員を助けられるなんて思わない。感謝されるなんて思っていたこともあった……けど、そこにあつたのは裏切りと絶望だけ。助けてきたというのに誰一人として助けようとはしてくれない。それが

この世界の真実。だから、僕はたった一人の為だけに生きよつて思つた)

「クソッ、クソッ！ 離れるよ」このクソ犬があ！」

「クソ犬呼ばわりとは酷いな……緋炎、戻つておいで」

緋雨が緋炎にそういうと、緋炎は一つ吼えると文字通り緋雨の傷口から体内に戻つていった。

半身にあたるほど密度で生成した獵犬・緋炎を体内に戻したことによつて魔血の密度が上がり、先ほどまでは比べ物にならないほどの力が身体に戻つてくる。それでも、生き血を吸つたときほど状態に達することはなかつた。

「なつ、オリジン……ブラッドー？」

「何も驚くことはないだろ、命を狙うつてことは否応無しに自分の命も狙われるつてことだ。ただ、変わつたといえば狩られる側になつただけのこと。さつきまでと何も変わってないさ」

手首の生々しい傷口を相手に向けて、緋雨は手のナイフを生成していく。

「な、なあ、取引しようぜ。アンタにだつて悪い話じやねえからさ、その言葉に緋雨は少し考えてから、何か思い当たつたのか

「……言つてみる」

そう一言だけ告げてから手を下ろす。

「か、感謝する。アンタは俺を見逃すだけで良い。俺はアンタの聞きたいことに答えられるだけ答えるつてのでどうだ」

緋雨はなすなの耳を手で押さえ、なるべく会話が聞こえないようにしてから答える。

「分かつた。誰に雇われたのか教える。その周辺組織も」

その瞬間、瞬間移動使いの男はにやりと笑つたかと思うと、何の前触れもなく数メートル後ろに移動していた。

「ギャハハ、誰がテメエなんぞに情報を漏らすかよ！ 善人面した化け物がよお！」

「そりが……けどな、それくらいじつちだつて考えてたよ」

「なつ！ テメヒビツヤッテ！？」

男は緋雨の足元を見て絶句した。何の感触も感じていなかつた右足に、赤い液体状の紐のようなものが巻きついていたのだから。

「もう君にチャンスはないよ……大事な一度限りの交渉権を失つてしまつたんだからね」

まるで答えるつもりはない。そういうわんばかりの口調で緋雨は男に答えると、男の足に絡みつかせている物体に形状変化の命令を指示する。

その瞬間に絡み付いていた紐状の物体に棘が生えて男の足を串刺しにする。

「オリジンブリッヂオオオ！」

親の敵を見るような目で男は緋雨にそう叫ぶと、手当たり次第に回りにあるものを緋雨に向けて瞬間移動させて押しつぶそうとする。緋雨は次に起こす光景をなすなに見せないよう、胸に埋める様に抱きかかえなおす。

「我の命の水は全てを覆う」

呴くとほぼ同時に、緋雨の傷口から血液が噴出すように流れ出て、本体を守るかのように球体を作っていく。

「なつ！」

瞬間移動によつて飛来してきた物質は「ど」とく血液の壁に阻まれ、緋雨に何のダメージを与えることすら叶わない。

「不意打ちでしか相手を狙えない人間が真っ当な勝負を井戸端ことが間違つてたんだよ……僕なら、見つかった時点で逃げるのに」

そんな絶望を瞬間移動使いの男は抱きながら、緋雨の手によつて意識を刈り取られた。

「ねえ……緋雨、終わった？」

それを肌で感じ取つたのか、なすなは埋めていた顔を上げて上田遣いに緋雨に尋ねる。

緋雨はにつこりと笑つて、頭をゆっくりと縦に下ろした。

その笑顔は戦いに勝利した安堵から来るものなのか、それとも戦

いの快感の余韻を味わっていたから出てきたものなのか、はたまたなずなを守りきることのできた達成感から来るものなのか……。緋雨はどの感情から来ているのか証然としないまま、本来の目的であつたなずなとスーパーで買い物をするといつ目的を果たすため、なずなを地面に下ろし、横に並んで手をつないで歩くのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9152y/>

オリジンブラッド・イモータル

2011年11月30日18時48分発行